

『天気の子』

2019年／日本／新海誠監督作品

大人はきっと、
君たちの役には立たないよ

会員 豊崎 寿昌 (48期)



「天気の子 スタンダード・エディション」
Blu-ray & DVD 発売中
Blu-ray: 5,280円 (税抜価格 4,800円)
DVD: 4,180円 (税抜価格 3,800円)
発売元: STORY / 東宝
販売元: 東宝
© 2019「天気の子」製作委員会

言わずと知れた「君の名は。」で社会現象を起こした監督の次作品（最新作は昨年11月公開の「すずめの戸締まり」）で観客動員1000万人を超えた2019年の国内興行最大ヒット作である（のであらずは割愛する）。ではあるが観客層は比較的若年層に偏っており、中高年が多い我が業界ではご覧になっていない方も多いかも知れない。

流行りのキャラクター造形のアニメーション映画で夏休みに公開された十代少年と少女のボーイミーツガールという外形を取る本作品であり、異常ともいえるリアルで高精度で光にあふれた背景とロックバンドであるRADWIMPSの劇伴と5曲もの挿入歌によって盛り上げられるクライマックスへの流れは完璧で、当然若者はそういう映画として楽しんで観る（本来そう観るのが正しい）のだが、思春期時代を遠くに置いてきた我々中高年が見ると、本作は同時期に公開されたいくつかの作品と同様、その背後に現代社会の矛盾を滲ませた問題作品である。雨が降れば水没する半地下の住まいから格差を描くのは「パラサイト」と、偶然入手した拳銃を発砲してしまうことで主人公が転落していくのは「ジョーカー」と、疑似家族が社会の「正しさ」の前に解体を余儀なくされるのは「万引き家族」と共通している。

そういう評論家的表現を描いて業界的な話をすると、本作での少年犯罪に対する警察、児童相談所まわりの描写が意外にも結構まともであることに

驚かされる。未成年労働発覚からの児童相談所通報、行方不明者届のみでは全く動かない警察が銃器犯罪がらみとなると最優先で捜査に動き、当初は逮捕せず任意同行の体を取り、主人公が逃亡するとなりふり構わず逮捕にかかるなどの一連の対応は一応現実でも説明がつく。ちなみに知り合いの家裁の調査官の方に聞いたところでは、家裁内部でも若手調査官は本作品を評価せず、ベテラン調査官は評価する傾向があるとのことで、作品内の老若刑事コンビと共通しているところが面白い。

世間でこの作品を評価しない声を見ると、前述の銃器発砲を筆頭に主人公（16歳）が逸脱行為をしまくることを許容できないというものが多い。規範に違反したら悪であり、罰を受けなければならない、主人公が少年審判の結果保護観察処分のみで済んだことを許せないらしい。ひいては主人公達が（世界を変えてしまったという責任を引き受けつつ）前を向いて終わるという結末にも反発がある。新海監督はそういう反応が出ることをわかっている、敢えて意見の分断を炙り出すために本作を作っている節さえある（本稿の表題は監督が本作公開に当たって某雑誌の取材に答えたもので、「大人」と「子ども」で全く違って見えてしまう本作が自覚的に作られていることがわかる）。我々弁護士としては、例えば少年法改正問題や死刑制度廃止問題で、そのような層に対してどんなアプローチと対話を持ちかけるべきなのか、考えさせられる。